

ラグビーで感情が起伏する喜びを知った プロセブンズ選手 林 大成 1



林大成自身が自らのラグビー人生をつづる(写真はすべて本人提供)

連載「プロが語る 4years.」から、東海大卒業後にキヤノンイーグルスを経て、2018年4月より7人制ラグビー(セブンズ)専任選手としてプレーする林大成(27)です。東京オリンピック日本代表の候補選手にも選ばれています。当連載は林自身が自らの歩みをつづっていきます。6回の連載の初回はラグビーとの出会いについてです。

期待に応えてラグビーを始め、すぐにはまった

中学校時代、僕はエネルギーのぶつけどころに困っていた。大阪市立瑞光中学校に進学し、「部活でもしようかな」と思っていたとき、担任やラグビー部の顧問、先輩に誘いを受けてラグビー部に入った。単純だが、期待されているようでうれしかった。大したきっかけはないが、きっかけなんて何だっていい。

実は小学校時代に、当時流行(はや)っていた漫画『テニスの王子様』を読んで、テニスを始めた。関西大会に出る程度の実力はあったので、テニスをやめることに「もったいない」という声もあった。でもラグビーをやろうと思い立った僕は、「もったいない」でテニスを続けることができなかった。当時から惰性で物事を進めることに、すごく退屈と苦痛を感じていたように思う。



瑞光中学時代の写真。「我ながらなかなかふてぶてしい顔をしている」と林

入部してすぐ、3年生の先輩に当たりにいったらはじき飛ばされた。本気でくるなよとめちゃくちゃム力ついた。入部した週末だか翌週だかには、1年生同士で試合が組まれた。右も左も分からなかつたけど、とにかくがむしゅらにプレーした。怖さがなかつたわけじゃない。でもめちゃくちゃ楽しかった。次の日、学校へ行くと担任やその他多くの先生たちが、僕のプレーについて話しかけてくれた。ラグビー部の先生が他の先生たちに僕の活躍を話してくれたのかな。

ラグビーで活躍すれば人に喜んでもらえる。

ラグビーを始めたての小僧ながら、そんなことを認識した。承認欲求ゆえかもしれないけど、いまでも覚えているほどにそれがうれしかった。もちろん、「楽しい」「うれしい」だけではない。ラグビーを始めて1~2週間の内に、「悔しい」「怖い」「痛い」も経験した。ラグビーを通じて、様々な感情が自分の中で起こっていた。

12歳にして惰性による退屈を感じていた僕にとっては、そのすべてが「喜び」に感じた。そりやあもうハマってしまうわけだ。

いつも「怖さ」があった

初めての公式戦デビューは中1の秋だった。負けがほとんど決まった状況での出場。緊張と怖さで、ファーストタッチでノックオンしたのを覚えている。僕はおそらく早熟型で、体が大きくなるのも人より早かったものの、当時の僕は十分に戦えるほどの実力はなかった。それでも試合に出してくれた先生には感謝している。いま振り返ってあの試合は、僕が特別な人間でも選手でもないことをよく表した試合だったと思う。

中学校に限らず、高校、大学でも、下級生で出るAチームの試合は、正直めちゃくちゃ怖かった。「ミスをしたらどうしよう……」「ダメな部分が露見されたら……」と、周りからの目や評価を過剰に気にする典型的なタイプ。だからいつも自信を持っているふりをし続けたし、「やるしかないだろ！」と決意しながら、心の底から吹っ切れる強さはなかった。あと単純に、相手チームの強いやつにタックルするのも怖かった。「吹っ飛ばされる怖さ」というよりも、「かなわない自分を認める怖さ」と言えばいいだろうか。

僕はミスをせず評価を落とさないために試合に出ているわけでも、勝てる相手に勝つことが楽しくてラグビーをやっているわけでもない。でも僕みたいな凡人にはよくあることなんじゃないかと思う。中学生だったときから10年以上、そんなマインドが拭いきれなかった。

中学3年間、公式戦ではほとんど勝てなかった。それでもラグビーに熱中し、夢中になり、本気で取り組めたのは、同じ温度感でプレーしてくれた中学ラグビー部のみんなのおかげだと思う。先輩、後輩、同期、先生に、本当に感謝している。大阪市の東淀川区という特に何があるわけでもない町だけど、ラグビーを通して何か貢献したいと考えている。

東海大仰星高校(大阪)への進学を決めたのは、中2のとき、花園(全国高校ラグビー大会)で優勝したのが仰星で、圧倒的に強くかったからだ。試合前、メンバーがグラウンドに登場しただけで会場が沸くほど圧倒的だった。そんなあこがれの仰星でハイレベルな選手達と日本一を目指し、ラグビーができることが本当に楽しみだった。



中3の夏、オール大阪で関西大会優勝。ラグビーを通じて多くの人や仲間と出会い、新たな充実感からさらにラグビーにハマっていった(中央列の右から4人目が林)

仰星で“あたり前”が変わり、ある偶然で U17 の主将に プロセブンズ選手林大成 2



高3のときの大坂大会決勝。この一枚はいまも実家に飾られている(写真はすべて本人提供)

連載「プロが語る 4years.」から、東海大卒業後にキヤノンイーグルスを経て、2018年4月より7人制ラグビー(セブンズ)専任選手としてプレーしている林大成(27)です。東京オリンピック日本代表の候補選手にも選ばれています。当連載は林自身が自らの歩みをつづっていきます。6回の連載の2回目は、東海大仰星高校(大阪)時代、U17日本代表での経験についてです。

ラグビーの中に生活がある日々

08年、仰星の整った環境のおかげで、努力の量は一気に増えた。ここで言う“整った環境”とは設備などの話ではなく、ラグビーに取り組む当たり前のレベルの高さのこと。全体練習後や休みの日、学校が始まる前にも、自主練をするのが当たり前。中には昼休みや試合後まで、ウエイトをしている選手もいた。量が成長を決めるわけではないし、意思なく取り組むことは努力ではないけれど、そこまでする選手たちが身近にいる環境で自分の“当たり前”も変わっていった。生活の中にラグビーがあったのが、ラグビーの中に生活があるに変わった瞬間だ。

高1の夏、菅平での練習試合などでも何度かAチームで出場していたが、やはり自信がなかった。自分よりうまい先輩はいっぱいいると感じていたし、そんな中で出場することに「やってやろう」とも思えず、迷惑をかけないようにとプレーしていたところが当時があった。そのためメンバー発表のとき、自分のメンバー入りに異議をとなえた先輩の声にも気にしないふりをしていたが、内心泣きそうになっていた。「俺だって、こんなこと思われて出たくないわ」と思いながら。実力がないからマインドも伴わずに活

躍できないのではなく、こんなマインドだったから活躍できずに成長スピードが遅れるんだと、当時の僕に言ってやりたい。

高2になるころには、仰星は「全員」ラグビーを強く意識するようになった。「ONE TEAM」と同義である。部員は100人。みんなが同じ意識をもち、それぞれが力になり、チームで戦う。そこからチームの文化が変わっていった。当時の僕はチームに貢献したいという思いが強くなり、これこそがチームのあるべき姿だと思っていた。この“あるべき姿”という思いが、後に自分を苦しめた。



仰星時代の林。このときからオリンピックを意識していたことが発覚！？

拳手とゴミ拾いで U17 日本代表キャプテンに

高2の夏にはU17の近畿代表に選ばれた。初めて集まった日の練習前、当時の監督が「キャプテンやる人、拳手」と言ったので、僕は5秒くらいの沈黙の後、手を挙げた。率先してやりたかったわけではない。でも誰も手を挙げないあの感じは嫌だつたし、近畿代表のキャプテンという肩書きは何かしらのステータスになるだろうという気持ちがあった。エゴイズムは誰もが持っているが、チームスポーツではそれを出しづらい空気がある。「キャプテンはステータス」なんて、当時はとても言えなかつたけど、高2の僕には確かにそんなエゴイズムがあった。

U17全国大会では九州、近畿、関東で決勝リーグを戦い、近畿は3位だった。その試合会場のトイレで、ある先生と一緒にになった。「こんにちは」と挨拶(あいさつ)をして、去り際にゴミを拾って外のゴミ箱に捨てた。

するとその先生に呼び止められ、「近畿のキャプテンの林か？」と声をかけられた。後にその人が大会後に選出されるU17日本代表監督であることを知った。そして僕はU17日本代表のキャプテンになった。

U17全国大会のパフォーマンスはこの際、置いておいて、僕は「拳手」と「ゴミ拾い」がきっかけでU17日本代表のキャプテンになったのは事実だ。もちろんこれは偶然が重なったもので、積極性やゴミ拾いを勧めるつもりもないが、教訓はある。適度な挨拶やゴミ拾いは、周りを心地よくする「Give」であり、それは自分のためでもある。他者目線に立ち、「Give」を考え、行動し、習慣にできると、それは人生の武器になる。ルールや強要ではなく、自ら考えて行動することで人格になる。もっと広い意味で言うと、「Give」は100%の自己犠牲や奉仕じゃなくいいと僕は考えている。例えばファンをつくり、応援してもらえるために「Give」をする。この意味で、エゴイズムと「Give」が共存すると思っている。

ラストゲーム、松島たち桐蔭学園との試合を前にして

高3になり、僕はキャプテンになった。全員が一つになり、チームの目標に対してそれぞれができることをやりきってこそチームである、と僕は思い込んでいた。その自分の価値観を基準に、選手を見定

めるようになってしまったのだ。一つになることを意識すればするほど、はみ出しどのをつくってしまう。「べき」や「ねば」を自分にも他の選手にも過剰に求めていたと思うし、それで勝手に練習をつらく感じていた。一つであることに正解の形はない。チームみんなで同じ目標を掲げていても、それぞれの奥底にある勝ちたい理由も熱量も違つて当然である。チームの目標がそれぞれの目標を包括するものであれば、チームの目標と個人の目標は共存できるし、相乗効果を生む。根本的な部分ではそれが違つて当然の中で、どれだけその相乗効果を生み、チームを導けるか。それがリーダーの腕なのだろう。しかし当時の僕は人に対して理解できないことが多く、自分の考えを多くの選手に押し付けていた。申し訳ないことをしていたなと思う。そんなことをあまり気にしなくていい代表候補の合宿なんかはすごく楽しかったし、伸び伸びとプレーができ、実際にパフォーマンスもよかったです。



3年生として、キャプテンとして、最後の花園にかけていた(左から4人目が林)

引退をかけた最後の花園(全国高校ラグビー大会)準々決勝で、松島幸太朗(現・サントリーサンゴリアス)や小倉順平(現・サンウルブズ)、竹中祥たちがいる桐蔭学園高校(神奈川)と当たった。これは誰にも話してこなかったが、前日の夜は勝てるイメージを持てず、それどころかドラマチックに負ける姿ばかりをイメージしていた。菅平での夏合宿では5-50ほどの大差で負けた。だから花園では接戦で負ける方がベターだ、と。自分たちは何も残せないで終わることが怖かったのだと思う。なんとも情けない話だが、そんなことばかりが頭に浮かんでいた。

結果は26-27。ドラマチックに負けた。その第90回大会は、桐蔭学園と東福岡高校(福岡)が63大会ぶりの引き分けによる両校優勝で幕を閉じた。

いま思い返しても、総じて仰星のラグビーに対する意識や当たり前のレベルの高さはすごかったし、仲間にはめちゃくちゃ助けてもらった。それでも納得いかず、思い悩む自分は一体なんだつたんだと思うが、まあ必死だったんだと思う。そのときの知識や経験の中でベストを尽くしていたであろうから、後悔はない。ちなみに卒部式が終了した直後、張り詰めていたものが切れたのだろう。体内のすべてのものが口から出てしまったかのように、一晩で3kg体重が落ちた。

東海大で落ちるところまで落ち、自分の狭さを知った プロセブンズ選手林大成 3



林(中央)2年生の秋に一度、一番下のチームまで落ちたが、3年生のときにまたAチームに復帰し、4年生では主将を務めた(写真はすべて本人提供)

連載「プロが語る4years.」から、東海大卒業後にキヤノンイーグルスを経て、2018年4月より7人制ラグビー(セブンズ)専任選手としてプレーする林大成(27)です。東京オリンピック日本代表の候補選手にも選ばれています。当連載は林自身が自らの歩みをつづっていきます。6回の連載の3回目は、東海大時代の葛藤についてです。

Aチームから一気に転落、部を離れることも考えた

強豪校の中で体育の教員免許が取得できる大学を考え、11年春、僕は東海大に進んだ。個人技がより重要視されていた当時の東海大のラグビーは、それはそれで楽しかった。僕は仰星時代、プレーには毎回一つの正解があって、それを常に求められている気がしていた。頭を使ってプレーする癖はついてきていたが、当時はあまり思いきってプレーできていなかったように思う。だから東海大では久しぶりに思いきり勝負ができているという実感があり、また新たにラグビーが面白く感じていた。

2年生の春季大会で初めてAチームに入ったものの、春の終わりにはBチーム、夏合宿ではCチームとDチーム、秋には一番下のチームでプレーするという苦汁をなめた。自分の精神的な未熟さが原因だったことは間違いない。ただその一方で、大学に入ってから自分が納得できないもの、違うと思うものには意見や主張をするようになっていた。環境の善悪ではなく、自分の考えとの不一致からだ。実際に僕は間違った主張もしていたため、周りから大人になるようアドバイスをもらうこともあった。ただ、納得できないものをそのまま受け入れ、結果の責任を他人に委ねることはしたくなかった。

ラグビーをやめようとは考えなかったが、別の場所でプレーすることを本気で考えた。僕の主張も間違った方向に行き、練習もまともにしていたくなかった。この時期はチームのことなんてどうでもよかったし、自分のレベルを上げることはするが、チーム練習には一切モチベーションがない状態だった。少し前まで切磋琢磨(せっさたくま)していた選手とも距離をとるようになっていった。「チームのため」なんて言葉は一切心には響かず、ラグビーが好きな気持ちすら、忘れてしまいそうになっていた。

主張の仕方を考え、いま自分がいるチームを思い

そのような状態になったことで初めて僕は、自分が理解できない人たちと思っていた人よりもはるかに自分が理解できない人になっている、と気がついた。みんなそれぞれの主張や理由がある。落ちるところまで落ちたことで、針の穴のように狭かった価値観が広がったように思う。

僕の価値観は変わったものの、誰かが自分のモチベーションを上げてくれるわけでも、自分を理解してステージを上げてくれるわけでもない。僕自身、ここからはい上がりたいと躍起になつたし、いまいる自分のチームを引き上げたいと思った。そのためには主張や意見の仕方も考えた。人とぶつからずに意見を伝えるため、授業や本などからヒントを得ようとした。やる気になれば、人は一瞬で変わるもんだなと思う。



大学4年間は自分の価値観を広げるきっかけとなった(12番が林)

これまでのラグビー人生の中で、この時期は物理的な練習量を一番増やしたし、置かれている状況とは相反してすごく充実していた。いま自分がいるチームで戦うという気持ちになれ、素直に楽しかった。結局、この2年生のときはBチームでシーズンを終えた。上のチームに上がることもそうだし、下のグレードで一緒にプレーした選手たちが自分を応援してくれたのがうれしかった。理解できなかった価値観が広がったこの時期は、多くの学びを僕にもたらしてくれた。恵まれた状況が恵まれているとは限らないし、人は苦境や制限のある中でこそ学ぶということを、身をもって知った。

キャプテンとしてチームを支え、支えられ

3年生の春と夏には顔面2回を含む計3カ所を骨折し、顔の中にはプレートが12枚入っていたときもあった。そんな日々を越え、秋の関東リーグ最終戦で公式戦デビュー。相手は唯一全勝だった流通経済大だった。最終戦の結果次第では大学選手権に出られない可能性もあったが、前半から35-5と大きく引き離し、61-29で快勝。なんとか個人としてもチームとしても結果を残し、大学選手権に出場した。

4年生となり、僕はキャプテンになった。所属チームなしでプレーをしているいまの僕を見ると、人によっては意外に感じるかもしれないが、実は中高大すべてでキャプテンを務めている。主張の仕方を修正しつつも、納得できないことには意見するという僕のスタンスは変わらない。監督やコーチとも意見交

換し、ラグビーのことはもちろん、チームの文化や惰性で続いているシステムの見直しなども話し合うようになした。少しずれたことも言っていたと思うが、辛抱強く付き合ってくれたスタッフに感謝している。

日本一を目指す中でいろんな変化が必要で、同期はもちろん、後輩たちにも協力を求めながらやっていたが、変化するときに全員が納得できる道などはなく、悩むこともあった。150人という大所帯。チームの文化を変えたいなら、トップは迷ってはいけないという思いから、自分から誰かに相談することはほとんどなかった。僕はしっかりした人間ではないので、至らない点も多くあったと思う。そんなときにバイスキャプテン(副将)や、同期、後輩から指摘や意見をもらったことはよく覚えている。僕は周りから見ると指摘しづらいタイプらしく、誰かから直接何かを言われることが少なかったように思う。だから正面きって意見してくれることがうれしかった。

最後の大学選手権、早稲田大に14-10で勝利して準決勝進出を決めたとき、グラウンドから見た部員や保護者たちがいる観客席の景色をいまでもよく覚えている。迎えた筑波大との準決勝、3ドロップゴールとそれをダミーにしたトライで後半27分に16-3としながら、最後に16-17で逆転された試合はしばらく賛否が分かれた。



最後の大学選手権で早稲田大に勝利し、年越しへ(左から2人目が林)

大学最後の試合は2月にあった日本選手権の東芝ブレイブルーパス戦。4年生のそのシーズンを通して、僕は初めてけがで欠場した。ファイトするチームの姿を、僕はウォーターボーイをしながら見て、泣きそうになった。いや、泣いた。

納会(卒部式)での試合が終わった瞬間、同期のみんなが駆け寄ってきて胴上げをしてくれた。誰が言い出したのか、ただの思いつきだったのか、僕は知らない。でもいまでも鮮明に覚えていて、本当にうれしかった。大学のハイライトは? とたずねられたら、僕はあの瞬間を思い浮かべることだろう。こうやって思い返していると、チームっていいなあ、15人制ラグビーっていいなあ、と思う。

自費でラグビー留学、セブンズでの高揚感を思い出し プロセブンズ選手林大成 4



キヤノンに進み、16年3月には3カ月間、ニュージーランドにラグビー留学をした(写真はすべて本人提供)

連載「プロが語る4years.」から、東海大卒業後にキヤノンイーグルスを経て、2018年4月より7人制ラグビー(セブンズ)専任選手としてプレーする林大成(27)です。東京オリンピック日本代表の候補選手にも選ばれています。当連載は林自身が自らの歩みをつづっていきます。6回の連載の4回目は、キヤノン時代と芽生えたセブンズへの思いについてです。

ラグビーは大学までと決めていた

東海大時代、僕はU20日本代表の候補になっておらず、そもそも公式戦デビューも3年生の秋と遅かった。そんな3年生のときに声をかけてくれたチームが1社あった。それも公式戦に出る前に、だ。理由を聞くと、下のチームにいて主張の仕方が激しかったころのふてぶてしい態度とパフォーマンスを見て、気になっていたという。ただ僕は、3年生のシーズンが終わったとき、社会人ではラグビーをやらないと考えていた。

しかし4年生になったばかりの4月、急に「1年だけでもトップリーグでプレーしたいかも」と思い立つ。トップリーグトライアウトの前日だった。ここを逃したらチャンスはないと思い、トライアウト主催者とつながりがある知人に連絡し、なんとかお願いした。先に東海大の木村季由監督へ連絡するのが筋だろうと分かっていたが、いかんせん、時間がない。木村監督の研究室の方向にごめんなさいと頭を下げ、話を進めようとした。

トライアウトに参加するには、履歴書の提出や保険の加入が必要だ。「特別扱いはできない」と断られたが、「うちのチームに個別でトライアルすることならできる」と言ってもらえた、翌週にはキヤノンイーグルスの練習に参加した。その日の夜、キヤノンから「受け入れたい」という電話をいただいた。ただ実

のところ、社会人になってもラグビーを続けることに迷いがあった。結局、「お願ひします」と返事をしたのは6月になってからだったと思う。

自費でNZ留学、学んだ2つのこと

15年、キヤノンに進んだ。プロを希望したが、最初は社員としての雇用契約だった。そのシーズンはプレシーズンも含め、半数近くの試合でメンバー入りを果たすも、鳴かず飛ばず。ラグビーは1年だけでもと考えていたが、ワールドカップでのジャパンの活躍に心を動かされた。自分もスポーツで人の感情をもっと動かせる選手になりたい。翌年もプレーすると決めた。

当初、キヤノンにはラグビー留学の制度があったが、16年から廃止になった。どうしても留学したかった僕はあきらめきれず、プロになってから3ヶ月、チームを離れさせてもらう交渉をし、16年3月に自費でニュージーランドに留学した。行きの飛行機の中でbe動詞の勉強をしたのを覚えている。



かむため、みんながハングリーでイキイキしていた。

そんなハングリーさとともに学んだことは、ぶつかりにいく姿勢だ。クラブチームの試合に出ると、味方にも相手にもその週のスーパーラグビーに出場しなかった選手がプレーしていたが、周りの選手はその選手との力関係など気にせず、お構いなしにぶつかりにいく。僕はそれまで相手選手との力関係を気にすることがよくあったが、ニュージーランドの選手達はそのときそのときの勝負を本当に楽しんでいるように見えた。

自分の価値を上げるために、セブンズへ

帰国後、キヤノンでの16年度シーズンは半分程度の出場だったと思う。17年度の契約交渉時、僕は当時のGMにセブンズ代表合宿への参加を打診した。自分の価値を上げるためにだ。代表という肩書きは今後のキャリアにおいて武器になる。正直なところ、それ以上の思いはなかった。

セブンズ代表の招集初日、僕は15人制ラグビーのセンターでプレーしてきた分、セブンズではゲームコントロールまではできなくとも、FWの中でのアクセントとなれるのではと思い、フッカーでプレーしたいと頼んだ。そこには、足が遅いという弱点をなるべく隠したいという気持ちもあった。当時はセブンズにトップリーガーはほとんど参加しておらず、チャンスだと思っていたが、ワールドシリーズのメンバーを決める選考は2回連続で落ちた。僕には武器が何もなかった。

17年度のシーズン最後のヨーロッパ遠征メンバーにはギリギリ滑り込んだが、バックアップメンバーとしてだった。けが人が出たことでメンバー入りし、初めて代表として世界の舞台に立った。緊張、高揚、興奮。久しく味わえていなかったこれらの感情が懐かしかった。

ラグビーで生きていく道を切り開くためにプレーする選手たちの姿に、林(右から3人目)も刺激を受けた

留学先はスーパーラグビーに所属するハーランダーズのあるオタゴ州。所属するチームには事前にプレー動画を送り、州代表のスコッドに入れてもらうところまで決まっていた。

スコッドにいる選手たちは、ラグビーで生きていくか働きながらラグビーをするかの瀬戸際にいる。朝6時からトレーニングに取り組むなど意識が高かった。契約を勝ち取り、プロとして生きる未来をつ

自分を最も高揚させてくれるもの求め

その後もセブンズの代表合宿に参加し、自分の当初の目的であった「日本代表」という肩書きは手に入った。初めて代表合宿に参加したときや代表メンバーに選ばれたときは、いろんな人たちから賞賛されて気持ちがよかったです。そんな注目や優越感はもちろん長くは続かない。「セブンズを続ける理由はなんなのか」を考えるようになっていった。

僕はもともと、大学でラグビーをやめようと思っていたように、ことあるごとにラグビーを続ける理由を考えてきた。だがワールドシリーズという舞台でプレーしたことにより、ラグビーをする理由の一つが明確になった。高揚感。あの高揚感でもう一度プレーしたい。あの高揚感が忘れられない。これはある種の中毒と言つてもいいだろう。それでもう一つ、東京オリンピックという舞台。競技人生最高の高揚感はここにあると思った。



セブンズ代表として活動をしながら、キヤノンでプレーを続けた

15年のワールドカップを見て新たな思いが芽生え、当初は19年のワールドカップを目指していたが、どこか悶々(もんもん)としていた。その舞台が現在地からかなり遠いことは分かっていた。笑われるようだが、そんなものは努力次第でいくらでも可能性は切り開けるという思いはあった。ただ、その計り知れない努力をなすほどのモチベーションがどこか湧ききらなかった。「自分じゃなくてもいい」ということに、気づいてしまっていた。

でもセブンズはどうか。余白だらけだ。セブンズを応援してくれているファンの方には本当に感謝しているが、それでも国内ではエンタメとしてはあってないようなものだと感じていた。オリンピック種目でありながら国内リーグはない、チームもほとんどない、代表にあこがれても目指し方がない、見る機会や触れる機会がないから興味をもつきっかけがない、みんなあまり知らない……。

オリンピックという舞台があり、その舞台に人生をかけて臨むというのに、そんな状況は寂しい。セブンズはプレーヤーやファンはもちろん、まだ競技を知らない多くの人にとっても、もっと楽しみを生み出せるはずだ。セブンズでなら、オリンピックでの結果、それまでの過程で自分がつくり出せる価値は多くある。

だから僕は「東京オリンピックでの優勝」という目標を定めた。

日本中に熱狂を、“ホームレスラガーマン”が見た 夢 プロセブンズ選手林大成 5



自分が求めるものを手にするために、保険なしで100%投じる。そのために、林は決断した(写真はすべて本人提供)

連載「プロが語る 4years.」から、東海大卒業後にキヤノンイーグルスを経て、2018年4月より7人制ラグビー(セブンズ)専任選手としてプレーする林大成(27)です。東京オリンピック日本代表の候補選手にも選ばれています。当連載は林自身が自らの歩みをつづっていきます。6回の連載の5回目は、セブンズ専任選手として築いた新たなスタイルについてです。

誰かを高揚させられる 「プロ」選手になりたい

「プロ」とはなんなのかと考えてたどり着いた答えが、「お客様をどれだけ呼べるか」ということだった。社員だとかプロだとか、そういった雇用契約ではない。16年からはキヤノンでプロ契約選手としてプレーしていたが、自分が呼べるお客様はどれだけいるのかを考えると、現実は自分が思い描くプロとはかけ離れていた。チーム

に入ればチームのファンから応援されて自分にファンがついた気になり、プロ契約になればプロを名乗れる。でも、プロとはそういうものではないだろう。

だから僕は、自分が思い描く「プロ」になろうと決心した。競技力を磨くのは当たり前だが、競技力だけでお客様を呼べるような選手は1%もないんだろう。例えばもし、格闘技が競技力だけをアピールする場になってしまったら、僕が見るのは那須川天心だけだ。

僕が掲げた目標は「東京オリンピックで優勝」だ。オリンピックという大舞台に頼ったものではなく、プロとして自分自身が熱量を高めていく。日本中を熱狂させたい。もっと輝きたい。そう思うようになった途端、自分の中で、15人制ラグビーのチームに所属してプレーすることが苦になった。

チームに所属することで安定はするが、自由度は制限されてしまう。そのままプレーし続けた先で、自分が望むものは手にできるのか。決断するまでに少し時間はかかったが、答えは明白だった。18年に僕はキヤノンイーグルスを退団し、15人制をやめた。そして日本ラグビーフットボール協会と男子7人制専任選手契約を結んだ。



キヤノンで過ごした3年間、プレーヤーとして成長できただけでなく、多角的に物事を見られるようになった

「所属チームなし、家なし」というポップさ

人からは思いきった選択だと言われたが、僕にとっては目的に向けた軌道修正でしかない。自分がやりたいことで、やれると思っているからする。例えば、できなかつたときのための保険を10%かけることで活動が90%になってしまうなら、保険はいらない。全BET。ここまでやれば100%失敗しない。絶対に成功するという意味ではない。絶対に納得できるという意味だ。

所属チームをなくしたと同時に、家も捨てた。毎日決まって行く場所はないのに、毎日決まった場所に帰る時間が非効率でバカらしく感じたからだ。セブンズ代表での合宿が年間で200日以上あるため、家を借りるのと日によって宿を変えるとでは、費用もさほど変わらない。

……というのは半分の理由で、もう半分はプロモーションのためだ。当時の自分の実力では、世間的な話題にまったくならない。自分が目指すのは東京オリンピックという大舞台なのはもちろんだが、熱狂をつくること。そのためには多くの人を巻きこんでいかなければならない。まずは認知され、興味を持ってもらう。「所属チームなし、家なし」というポップなスタイルは、東京オリンピックが近づくにつれて、自分が実力をつけていくにつれて、話題として取り上げられるのではないか。

そんな打算的な考えがあった。半分と言ったが、本当のところはこれが8割なのはここだけの秘密だ。それがうまくハマり、昨夏のジャンクSPORTSで僕は「ホームレスラガーマン」として、オリンピックレジェンド達に混じって出演を果たした。

スーツケースのためにクラウドファンディングを実施

家がなくなったので、大きめのスーツケースが必要になった。とにかく自分を知ってもらい、自分に感情を乗せてもらおうと考え、「すべての荷物と夢を詰めるスーツケースを買う」ということで、達成目標金額3万円のクラウドファンディングを実施した。少しふざけたような企画に見えるかもしれないが、僕は

大面白目だった。すべて失敗に終わることや批判されることなどいろんな不安があり、クラウドファンディングを開始する最後のボタンを押す指は震えていた。

結果は 79 人もの方々が支援してくださり、目標金額の 450% が集まった。支援者からはたくさんの激励の言葉もかけていただいた。ただ、ネット上には「夢がない」「プロ失格」などと批判する声もあり、これを機に切れた人間関係もあった。それでもこの企画は僕にとって成功だったし、僕の原動力になり、応援してもらうことの尊さも強さも教えてもらった。

セブンズ一本にかけて最初にあった国際大会が、18 年度のジャパンにとって最も大事な大会であった香港セブンズだった。しかし、僕はそのメンバーに選ばれなかった。実力がなかったので仕方がない。ただその反面、つくづくこの環境を選んでよかったと感じた。セブンズ代表であり続けないとプレーする場所がない。そんな極端な環境に飛び込んだことで、僕は成長するしかなかった。協会との契約期間もトップリーグのように年単位ではない。それでよかったし、それがよかった。



セブンズ代表であり続けないとプレーする場所がない。だったらもう、迷うことはない

僕の武器と夢が詰まった「全国ステップチャレンジ」 プロセブンズ選手林大成 6 完



林(左端)は「全国ステップチャレンジ」で全国を旅し、セブンズの面白さを多くの人に伝えている(写真はすべて本人提供)

連載「プロが語る 4years.」から、東海大卒業後にキヤノンイーグルスを経て、2018年4月より7人制ラグビー(セブンズ)専任選手としてプレーする林大成(27)です。東京オリンピック日本代表の候補選手にも選ばれています。当連載は林自身が自らの歩みをつづっていきます。6回の連載の最終回は、「全国ステップチャレンジ」など新たな挑戦を続けるいまについてです。

ワールドカップを観客席で見て

18年7月、セブンズのワールドカップがあった。4月にあった香港セブンズのメンバーから漏れた僕にとっては、いわゆる背水の陣だった。なんとか遠征メンバーに入ってアメリカには行ったものの、一人がバックアップにまわることになる最終のメンバー選考で、大会メンバーから外れた。アメリカに行ってからのパフォーマンスがあきらかによくなく、とくに他国チームとの試合形式のゲームでは散々だった。世界で活躍するだけの自信がなかったのだと思う。実力不足を補おうと、「自信を持とう」「自分はできるんだ」と過剰に言い聞かせていた。しかし世界のレベルを前に、ボールキャリアとしての能力は乏しく、自信を持って意思決定や状況判断ができなかった。代表でありながら、何をすればいいのか分からなくなっていた。

観客席から見ることになったワールドカップ、日本は第2戦でフィジーとぶつかった。10-35で敗れたものの、後半の途中まで互角の戦いを見せた。チャレンジトーナメント(9~16位決定トーナメント)にまわり、ロシア戦は20-26で敗れ、最後のケニア戦は26-14で勝利した。ベスト8を目指していたチームにとって、15位という結果は満足いくものではなかった。それでも大舞台で活躍するチームメートは誇らしかったし、試合に出られない自分、世界で戦えるマインドでなかった自分への悔しさが強く残った。

武器をつくるため、ステップに目をつけた

帰国後、ボールキャリアとしての武器をもつべく、ステップのトレーニングを増やした。しかし、18 年度のワールドシリーズには 10 大会中 9 大会に出場したが、ステップが試合で出たことはほとんどなかった。ステップがうまくなかったからだ。

19 年 6 月にワールドシリーズが閉幕し、一区切りついたところで今後のことを考えた。このままの取り組みの先に、東京オリンピックで活躍して優勝する姿が見えるか。そこに自分自身がつくりだす熱狂はあるのか。このままでは難しいと感じた。局所的なアクションではなく、どういった活動をすればそこに近づけるのか、という考えから生まれたのが「全国ステップチャレンジ」である。



「全国ステップチャレンジ」初期、名古屋の中学生 68 人と。この中で最初から林のことを知っていたのは 3 人程度だった

ステップの練習をしても、一人で淡々とやるだけでは成長が見込みづらい。それを誰かと一緒に取り組み、言語化して伝え、SNS などに動画投稿する。人に見られているという環境をつくり、成長せざるを得ない状況に自分を置いた。成長だけが目的なら、身近なパートナーと取り組めばいい。しかし、ストーリーがないところに熱狂は生まれない。「所属チームなし、家なし」の自分がもつ自由度を生かし、全国からパートナーを募集し、旅をしていくという企画にした。

セブンズに興味を持ってもらい、試合を見てもらうためにはアクションが必要だ。だから、こちらから会いに行くことにした。活動を続けることでファンを増やし続け、「何かやっているぞ」という興味を持ってもらうことでいろんな人から注目されることを狙った。

下手だったステップがトライにつながった瞬間

これまで撮影してきたステップでうまくいったものを抜粋し、解説を入れて SNS で発信する。まずはこれを 10 日間に亘(わた)って実施した。パスやキックやタックルなどとは違い、国内ではステップのコ一

チングはほとんど実践されておらず、僕の動画は一気に広がった。その後、「全国ステップチャレンジ」に多くの人が参加してくれた。

当初は実際にうまくなんともなく、ハッタリをかましていただけだったので、ステップがうまい人たちが僕のステップをバカにしていたと思う。1on1でのステップに誘われても、正直なことを言うと、下手なのがバレるのが嫌でやりたくなかった。そんなんだから上達するしかなく、狙い通り一気にうまくなりだした。ボールキャリアとしての武器のためにステップを始めたと言ったが、実はその理由は半分で、もう半分は“動画ウケ”を狙ってのことだ。自分が頑張れる理由はたくさんあった方がいい。この「全国ステップチャレンジ」を続けるために、クラウドファンディングで支援を募ったところ、(ありがたいことに)予想以上の支援者と金額が集まり、しばらく先まで続けられることになった。企業からサポートもしてもらえるようになり、活動の幅もより広がっている。



マツシマホールディングスなどの企業からサポートを得て、「全国ステップチャレンジ」の活動の幅は広がった

それなりのステップが踏めるようになってきてからしばらくの間、よく言われる言葉があった。「試合で踏め」。ごもっともなツッコミだ。自分自身もそう思っていたところ、今年3月に行われたバンクーバー大会でステップからトライを決められた。たった一つのトライにすぎない。それでも、いろんな僕のステップを見てくださった方々が、僕のそのトライに反応をしてくれた。そんな感情の動きをもっと広げていきたいし、東京オリンピックではいろんな人の感情を乗せて、搖さぶって、熱狂を生み出したい。

人生を豊かにする「高揚感のある挑戦」を求めて

最終的にやりたいことは何かと聞かれることがあるが、自分でもよく分からないのが本音だ。やりたいことは日々変わるし、次の手として考えていたことも、いつの間にか変わっている。進んでいけば、できることも見える景色も変わるので当然だろう。国内ではステップが徐々に広がってきたと思うが、ステップが当たり前のスキルやトレーニングとしてもっと浸透したら、プレーヤーもファンも楽しみが増えると思っている。

いま僕が国内でやっていることを他競技や世界に広げて活動したいし、フィジーに武者修行にいったり、世界のトップ選手と1on1の勝負もしたりしてみたい。1on1の大会ができたら楽しいだろう。それらすべての活動を通じて、セブンズという競技のステージも上げていけたらと思っている。僕がやっているYouTubeなどは、そんな夢につながる手段の一つ。いま思い描いている僕のやりたいことも、これからどんどん形が変わっていくだろうが、僕の根底にある「高揚感のある挑戦」という思いは変わらない。

僕が15人制ラグビーをしていたとき、また18年にやめたとき、どこからもオファーはなかった。しかし15人制から離れて2年経ってからは、15人制のいくつかのチームから話がくるようになった。すごくうれしかったし、ありがたいとも思った。だが、つい調子に乗って「オファーを出す際の交渉スタート金額は最低2500万からです」と公表したら、一斉に手を引かれてしまった。それでいい。勘違いと言われようが笑われようが、僕には信念と覚悟がある。

僕はストレス耐性が弱く、気持ちが乗らないことをやり通すことができない。その反面、新しい一步を踏み出すときのリスクを顧みずに行動ができる。だから、人生をラグビーにかけるのではなく、ラグビーを人生にかけるという考えをもった。この先も続く人生に、いかに自分の尺度で充実感をもたらしていくか。ラグビーに多くのことを捧(ささ)げてきた分、ラグビーを活用して人生の選択肢を広げていきたいと考えている。競技者として活躍できる人間は一握り。そして必ず終わりがあり、その先も人生は長く続く。だからこそ、人生を豊かにするためにどうしたらしいのか。誰しも一度は、自分に問いかけてほしいと思う。

先が見えないなら、もっとその先を見ればいい



目指していた目標が見えなくなっても、歩みをやめなければ、終わりじゃない

新型コロナウイルスの影響で大学ラグビーは春季大会が中止になり、スポーツ界全体に先行きが見えない不安があるのが現状だ。目指していた舞台がなくなり、モチベーションを保てずにいる学生も少なくないだろう。僕が目指してきた東京オリンピックも1年延長となった。リアルな高揚感を味わえなくなり、これまでの手法では価値が感じづらくなつたと感じている。

それでも、制限があるからまだからこそ、生まれるアイデアやできることはある。先が見えないときは、そのまた先を見据えていまを歩けばいい。いまはチャンスだ。今までとは違った視点で自分と向き合い、自分の中にある本当の欲を知り、小さいことから踏み出せばいい。競技に没頭していたときには見えなかつたものが、いまならきっと気づけるはずだ。

いまがどれだけやるせない状況であっても、大切なものを取り上げられてしまっても、バッドエンドではない。前に進もうと歩き続ける限り、その道は続いていく。僕自身、コロナ禍に直面して立ち止まることもあったけれど、やっぱり走っていたい。外的要因に支配されず、それぞれが納得できる未来に向けて、まっとうしよう。

いまがどれだけやるせない状況であっても、大切なものを取り上げられてしまっても、バッドエンドではない。前に進もうと歩き続ける限り、その道は続いていく。